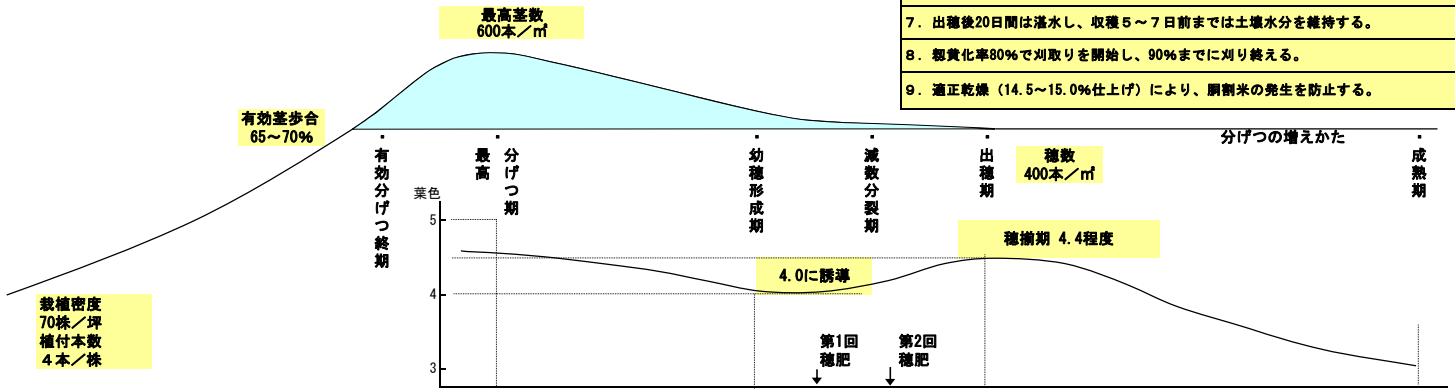
高品質・良食味の「富富富」の移植栽培基準例（JAくろべ版）

540kg穫り収量構成の目安

収量構成	目安
㎡当たり最高茎数（本）	600
有効茎歩合（%）	65～70
㎡当たり穂数（本）	400
平均一穂籾数（粒）	75
㎡当たり籾数（百粒）	300
登熟歩合（%）	80
玄米千粒重（g）	22.3

栽培のポイント

1. ５月15日を中心として、好天日に田植えを行う。
2. 基肥窒素量は、「コシヒカリ」（収量540kg/10aを基準）の２割減を基本に施用する。
3. 株数は、坪当たり70株以上を植え、良質の茎を早く確保する。
4. 確実な中干しにより過剰分げつの抑制、根圏発達の促進とともに、適正な葉色へ誘導する。
5. 出穂30日前から入水し、幼穂形成期の葉色がSPAD値35（4.0）になるよう誘導する。
6. 穂肥は適正量を適期に施用し、穂揃期の葉色をSPAD値35（4.4）に誘導する。
7. 出穂後20日間は湛水し、収穫５～７日前までは土壌水分を維持する。
8. 籾黄化率80%で刈取りを開始し、90%までに刈り終える。
9. 適正乾燥（14.5～15.0%仕上げ）により、胴割米の発生を防止する。



月日	4月		5月		6月			7月		8月		9月	
	4/26		5/15		6/4	6/11	6/15	7/13		8/4		9/13	
生育期区分	育苗期		田植期	活着期	有効分げつ期			無効分げつ期	幼穂形成期～穂ばらみ期		登熟期		
水管理			やや深水	浅水管理	入水停止→溝掘り中干し		落水期間が長めの間断かん水		出穂30日前からの入水（ヒタヒタ水）	出穂から20日間は湛水管理		間断かん水（落水を急がないように）	

栽培管理のポイント

- 換気を行う。
- 育苗ハウスが二十五度以下になるよう、積極的に
- 播種量は一箱当たり乾籾一二〇ｇ以下とする。
- 播種日は四月二十六日を中心とし、育苗日数は十九日間程度を目安とする。
- 十分に浸種して芽出しを確実に行う。
- 田面の均平を図る。
- ゆっくりと耕起し、作土十五cm以上を確保する。
- 五月十五日を中心（五月二半旬～四半旬）とした田植えの実施
- 基肥窒素量は地区コシヒカリの二割減を基本とする。
- 株数は坪当たり七十株以上を植え、良質の茎を早く確保する。
- 一株の植付け本数は四本とし、三cm程度の深さに植える。
- 田植後はやや深水として活着を早める。
- 活着後は浅水管理として分げつの発生を促す。
- 田植後四週間までに中干しを確実に開始し、無効分げつの抑制、根圏発達の促進とともに、適正な葉色へ誘導する。（茎数の目安320本／㎡）
- 田植後三週間を目安に入水を止め、適度な土壌硬度を確保した上で、田植後４週間までに溝掘りを行う。
- 出穂三十日前まで、落水期間が長めの間断かん水を行う。
- 出穂三十日前からの入水（ヒタヒタ水）により、過剰な葉色低下を防ぐ。
- 幼穂形成期の葉色は四・〇に誘導する。（SPAD値35）
- 七日後に施用する。
- 分施栽培における穂肥は、幼穂形成期七日後とその（SPAD値35）
- 穂揃期の葉色を四・四に誘導する。
- カメムシ類は穂揃期防除を中心に確実に行う。
- 穂いもち防除を穂揃期に行う。
- 出穂から二十日間は湛水状態を保つ。
- フェーン時はかん水して、乾燥害を防ぐ。
- 刈取り予定日の五～七日前まで間断かん水する。
- 籾の黄化率八〇%で刈り取りを開始し、胴割れ防止のために、九〇%までに刈り終える。
- 適正な乾燥速度と仕上水分十四・五～十五・〇%を厳守し、胴割米や過乾燥米の発生を防止する。
- 一・九ミリのふるいで選別する。
- 珪酸質資材等の施用により地力増強に努める。
- 稲わらの腐熟を促進するため、秋耕を行い、必ず排水溝を掘る。